『南総里見八犬伝』における女性像

赤坂梨花

はじめに

『南総里見八犬伝』は、江戸時代後期に曲亭馬琴によって書かれた長編小説である。二十八年もの歳月（文化一一年～天保一三年（一八一四～一八四二））をかけて著された全九十八巻、一〇六冊に及ぶ大作であり、江戸時代の戯作文芸の代表作とされる。[1] 馬琴は中国古典に深い造詣があり、神秘的な因縁によって結びついた英雄たちが集結するという設定は、『水滸伝（すいこでん）』[2] からの影響である。

さて、『南総里見八犬伝』は八人の勇者が活躍する物語ではあるが、物語の発端と展開には女性たちの存在が大きく関わっている。しかし、江戸時代の倫理観や常識が今の感覚とかけ離れているためなのか、善とされる女性像があまりにも人間味に欠けている。感情よりも道徳や運命や神の御心に従い、生への執着が薄く、身の潔白や親への忠義のためなら進んで命を差し出す。一方、自己の保身や欲に忠実に生きようとすると、手段を選ばず言葉巧みに人を操る悪女にならざるを得ない。それは、当時の女性の立場が非常に不自由かつ不安定で弱いものであったからともいえるが、そもそも当時の儒教の教えを忠実に守ろうとすれば男であっても同様で、特に武士は情より大義を重んじ、主君や親の命令とあらば喜んで命を投げ出すことが当たり前とされる世の中に生きていた。

しかしそのことを考慮してもなお、八犬伝に描かれる女性たちは不遇過ぎる。聖女的な描かれ方をしている女性たちの中には、まるで死ぬために登場してきたかのような存在も多く、八犬士の妹、沼藺（ぬい）や妻の雛衣（ひなぎぬ）などは登場後あっけなく死んでしまう。また、悪女側として描かれる存在であっても最後は非業の死を遂げるの

である。本稿では、そのような『南総里見八犬伝』の女性登場人物の描かれ方に特に着目する。それぞれの女性を聖女と悪女の観点から分類し、その特徴と作中における生涯、時代背景および思想との関わりを考察していきたい。

なお本稿における梗概作成や考察は、濱田啓介『新潮日本古典集成・別巻　南総里見八犬伝　一～十二』[3]の原文に基づき、平岩弓枝『南総里見八犬伝』[4]の解釈を参考とした。

一　聖女たちの悲劇　―受難と宿命―

（一）伏姫

里見義実の娘として生まれ、かぐや姫のように光り輝く美しさを持ちながら、三歳になってものも言わず泣いてばかりの子供であった。洲崎明神参籠の帰り道に出会った老人が「仁義礼智忠信孝悌」の文字が彫られた水晶の珠を首にかけると、それ以降は健やかに成長し、十六歳になる頃には才色兼備の女性となった。父義実への玉梓（たまずさ）の呪いにより、飼い犬八房と婚姻することとなる。

伏姫はどこか浮世離れした雰囲気を持っており、人や女としての欲はない。ただ神仏の御心に沿い、八房との約束で混乱した父に凛として儒教の信義の教えを説く。伏姫の言葉を聞いた義実は、洲崎明神で会った老人の「この幼児の多病は悪霊の祟りであり、また運命は名によって判ぜよ」という予言を思い出す。伏姫という名前は盛夏の候を表す三伏の伏から取ったはずだが、人が犬に伴われる、という伏の字に生まれながらの宿命が暗示されていた。つまり伏姫と八房の婚姻は、伏姫がこの世に生を受けた瞬間から既に決定していたことであり、逃れられない宿命であったのだ。

この宿命を受け入れた伏姫は八房と洞窟に住むことになるのだが、深窓の姫君として贅沢に育った身でありながら嘆きや不満を漏らすこともない。自らの運命をそのまま受け入れ日々神仏に祈りを捧げる姿は、女性という性すら超越していてまるでストイックな修行僧のようである。その神性は呪いを受けた八房さえも浄化し、ついには仏心を芽生えさせるに至った。八房が情欲をなくし法華経に耳を傾けるようになった段階で、八房に取り憑いた玉梓の呪いは既に浄化されているのである。伏姫の神性が玉梓の怨霊に勝ったのだ。

しかし、物語はこれで終わりではない。同化した「気」によって八房との子を身籠ったと予言された伏姫は、自己の尊厳を激しく傷つけられ、怒りと屈辱を覚えて自害を決意する。助けに来た大輔と父義実の目の前で、八房に穢されていないことを証明するために自ら命を断つのであるから、婚約者や親への情愛よりも、

自己の尊厳に重点を置いているのがわかる。

伏姫は人間としての命を終えてからが活躍の始まりでもある。神女となって八房と共に里見家の繁栄の守護神となるのだが、常に八犬士を守り導き、親兵衛に至っては手元において八犬士の中心的存在に育て上げる。それは母性に溢れた慈しみの神であり、馬琴が夢見た理想の女性像とはまさに、母神となった伏姫そのものに体現されているのではないだろうか。

（二） 浜路

もともとは煉馬の武士、犬山道策の子であったが、二歳の時に犬塚信乃の伯母の亀篠（かめざさ）夫婦の養女となった。信乃と許婚であったが、亀篠夫婦の企みにより信乃は旅に出され、陣代の息子簸上宮六（ひかみきゅうろく）との婚礼支度が進められる。それを知った浜路が自害しようとしたところを浪人左母二郎（さもじろう）にさらわれるが、信乃が陥れられたことを知った浜路は左母二郎に斬りかかり、逆に殺されてしまう。

浜路は清楚で可憐、純情な乙女である。許婚である信乃との結婚を心待ちにしているのだが、その美しさゆえに宮六や左母二郎に恋心を抱かれ、亀篠夫婦に利用される。信乃が旅立つ前夜には信乃の部屋まで忍んで行き、どうか一緒に連れて行って下さいと涙ながらに懇願する情熱的な一面もある。大義のために連れては行けないと断った信乃のことをそれでも思い続け、操を守るために自害も厭わず、命が尽きる最期の瞬間まで信乃を案じて死んでいった。

浜路の懇願を断る信乃には賛否が分かれるところだが、明治に入って坪内逍遥は、この場面を若い男女の情欲を描いていないと批判している（『小説神髄』[5]）。しかし徳田武氏は、この場面にこめた馬琴の意図を次のように解説している[6]。

> 馬琴の意図したものは、いいなずけを慕う女性と立身出世を思う男性との立場の相違、双方のそれなりに思わくが異なる心情を、まっこうからじっくりと描くことであった。若い女性の立場と心情とを、女性を男の玩弄物とみなすことなく正面きって描いた文章は、近世の無数の小説のなかでも稀有なものであり、またそうした描写は、「水滸伝」や「三国志演義」にもないものであった。

浜路が生に対してもう少し執着心を持っていたならば、宮六の妻になって贅沢な暮らしをするか、或いは女たちには人気のある色男の左母二郎と暮らすかの選択もあっただろう。けれども、も

う二度と会えないかも知れない信乃に操を立てる一途さは、儒教の教えによるものなのか、思春期特有の純粋さによるものなのか、現代人の感覚からすれば極めて不器用な生き方に感じてしまう。

死の間際まで無念の思いを抱いていた浜路の死は憐れではあったが、後に同じ浜路という名前の娘（後々、鷲にさらわれていた里見の姫であったことが判明する）に乗り移り、信乃の前に現れる。浜路に操を立てて独身を貫こうと決意していた信乃に対して、目の前の浜路と結ばれることが宿命であり、後に幸せの種を撒くと説く。物語の最後にはこの浜路姫と信乃が結ばれるのであるが、馬琴は浜路の悲劇に対する読者のフラストレーションをこのことで軽減させているのではないだろうか。

（三）雛衣

八犬士である角太郎（後の犬村大角）の妻となった、野菊の花のように可憐で愛らしい女性である。角太郎の父赤岩一角は山猫の妖怪退治に出掛けて食い殺され、妖怪は神通力により一角に成り済まし角太郎を虐待するようになった。そのため角太郎は亡くなった母方の伯父犬村儀清（のりきよ）に引き取られ、その娘の雛衣と夫婦となった。しかし伯父夫婦が亡くなると、犬村家の財産に目をつけた偽一角の後妻の船虫が夫婦を呼び戻し、雛衣のお腹が誤って飲んだ珠のせいで膨れてくると、不義の子を宿したと言いがかりをつけて離縁させた。その後角太郎にも難癖をつけ、財産を全て取り上げて追い出した。思い詰めた雛衣は入水自殺をしようとするが、魂胆のある船虫達に助けられ、その後一角の目の傷を治すためお腹の子の肝と雛衣の心臓の血をよこせと迫られる。雛衣が自らお腹を切り裂いて自害すると、その傷口から「礼」の珠が飛び出し、妖怪の胸骨を打ち砕く。

儒教の教えでは親は絶対的な存在であるため、角太郎は妻雛衣と別居させられ、財産を取り上げられ、さらには雛衣とその胎児の命まで要求されても怒ることができない。普通に考えれば、父と義母の要求は無茶苦茶で常軌を逸している。自分の目の治療のために嫁と孫の命をねだるような舅はどう考えても普通ではない。だが儒教の教えを堅く守ろうとする角太郎は偽父に対して、「自分の命に変えてもそれだけは」と懇願するほかないのである。そんな夫の苦悩を見かねて雛衣は死を選ぶ。舅に従ったのではない。あくまでも夫の窮状を救うためだった。

雛衣は角太郎のことを思うあまりに犠牲となるのだが、これは浜路の時と同じパターンである。一途で可憐な妻や許嫁をかばいきれない男性に対して、冷淡さや物足りなさを感じるのは現代の

感覚ゆえなのだろうか。角太郎は、雛衣のお腹が大きくなったのは誤って飲んだ水晶の珠のせいだと知っていた。それなのに親から言われるままに離縁をし、雛衣が身の潔白を訴えても何のフォローもしない。「もし話を聞いて頂けないなら死ぬ覚悟で参りました」という雛衣渾身の訴えにも「無言の行」を貫き通し、たとえ身投げしても水晶の珠が守ってくれるだろうから大丈夫、と考えるのである。疑いを晴らしたい、という雛衣の思いには一切答えていない。

雛衣が命がけで無実の罪を訴える場面は憐れで切なく、出版当時多くの女性の同情と涙を誘ったという。この場面を徳田武氏は次のように解説している。(7)

江戸時代は、義理の親の没義道（もぎどう）な理由付けによって離縁を要求された嫁は少なくなかった。また、親に気がねして妻をかばってやらない、というケースも少なくなかった。馬琴はそうした哀れな嫁の立場に即して、義父母の圧迫に抵抗することのできない、また夫の加勢を得られない、遣る瀬ない心情を綴っている。つまり雛衣の悲劇は、小説だから極端な形で描かれてはいるが、当時の嫁が抱えている悩み、言葉を換えれば、社会問題の一つを取り上げたものである。そうした普遍性を備えていればこそ、大勢の女性読者が雛衣の口説や悲劇を読んで共感の涙を流したのである。

身に覚えのない濡れ衣をきせられ、最後は自ら犠牲となった雛衣の一生は憐れではあるが、愛する角太郎の腕の中で感謝の言葉を聞きながら亡くなっていったことだけが唯一の救いである。

（四）沼藺

小文吾（八犬士）の妹。容貌は、いわゆる〝鎌倉風のいでたち〟で田舎じみたところはなく、派手なようだが子持ちのため十九歳にしては老けた感じ、とある。夫の房八と兄の小文吾が諍いを起こし、その確執のために離縁。実家に乗り込んできた房八と小文吾の争いの巻き添えで息子の大八が死んでしまうが、後に奇蹟的に蘇生し、生まれた時から開かなかった左手から仁の珠が転がり落ちる。大八が八犬士の一人であったことに喜びを感じながら房八と沼藺は息を引き取る。

沼藺もまた、因縁による悲劇を味わう女性である。仲良く暮らしていた優しい夫、房八から突然離縁を言い渡され、夫の豹変ぶりも理解できないし、仲の良かった兄小文吾になぜそこまで敵意

を抱くのかもわからない。まだ幼い大八を抱えてこれから先のことも考えられず、ただ途方に暮れて泣くばかりだった。房八と小文吾の激しい修羅場に巻き込まれて大八が死に、自分も致命傷を負い、もはや絶望しかないと思ったとき、薄れていく意識の中で夫の本意を知る。房八は父と兄を救うために、二人が匿っていた信乃と瓜二つの自分の首を差し出すつもりだったのだ。全ての謎が解けて感銘さえ受けた沼藺は、破傷風にかかった信乃を助けるために夫とともに血を分け与えた。さらに息子の大八が八犬士の一人であることがわかり、房八から「天晴れ、よい子を生んでくれたぞ」と褒められた沼藺は「ああ、よろこばしや」という言葉を最後に残し、とても安らかな気持ちでこの世を去るのである。

沼藺はごく普通の女性であり、まるで犠牲になるためだけに登場させられたような存在であるが、沼藺の名前を逆さにすると「いぬ」になり、夫の房八は「八房」となる。また沼藺の先祖と房八の先祖には因縁があり、山林と名乗っていた房八のもともとの苗字は犬江であった。房八と夫婦になることも、沼藺が誤って殺されることも、息子が八犬士になることも、すべては前世からの定めであり生まれた時から準備されていたことであった。更にいえば、沼藺が死ななければ瀕死の信乃を救うことはできなかったし、大八は房八に蹴られたことによって犬士の証である牡丹の痣ができたので、それも想定内の出来事だったのである。

悲劇を決定づけられていた沼藺の人生は儚いものではあったが、八犬士の中心的存在となる犬江親兵衛の母となることで、その死は見事に昇華されるのである。

二　悪女たちの末路　―奸計と破滅―

（一）　玉梓

滝田城主陣余光弘の愛妾であったが、光弘が夜毎の淫楽で臥せると、佞臣の山下定包と通じ共に悪政を働く。定包の奸計により光弘が殺されると、玉梓は城主となった定包の妻となるが、光弘の家臣であった金碗八郎の訴えによって里見の兵に滝田城は落とされ、玉梓は捕らえられた。

玉梓の美しさは海棠の花[8]が雨に濡れて紅くうちしおれたような風情とされる。涙を流して許しを乞う玉梓に里見義実も心を動かされ命を助けようとしたが、金碗八郎に諫められ思い直す。その時玉梓はすさまじい形相で「悪霊となって里見の家を末代までも祟ってやろうぞ。お前の子や馬子までも、畜生道へ追い落とし、この世からなる煩悩の犬にしてやる[9]」と呪う。玉梓はこの直後に金碗八郎によって首を落とされるが、怨霊に姿を変え里見の家を

祟り続けるのである。

もしも玉梓が、引き立てられてきた際に即刻死罪を申し渡されていたなら、これほどの恨みを里見義実に持ったであろうか、と考えてみた。玉梓の恨みの言葉には「いったんは助けると言って望みを持たせておきながらその一言を取り消すとは」という強い怒りがある。裁きの場に来るまでは玉梓も、死罪か助命かは五分五分、という覚悟でいたのではないだろうか。一緒に悪政をしてきた定包が逆臣として殺されている状況であり、玉梓のしてきた悪事も金碗八郎によってすべて白日のもとにさらされている。最悪の結果も想像はできたが、とりあえずは足掻いてみようと里見義実の男としての弱さと情にかけたのである。そして一度は自分の魅力と演技力で助かった、と安堵したのに、金碗八郎のせいで死罪になってしまった。自分の女としての魅力が通じず余計な謹言をする八郎も許せないが、義実の安易に人の命をもてあそぶような言動こそが許せない、というのが怒りの深部にあるのではないだろうか。後に里見義実は犬の八房に対しても取り返しのつかない約束をしてしまうのだが、絶望や怒りというものは与えられた希望が破れた時に訪れるものであり、義実がすぐに反故にするような約束を口にしたことで不幸の連鎖が続いてしまうのである。

八房に玉梓の怨霊が乗り移ったことについて、馬琴は『犬夷評判記』[10]の中で次のように述べている。[11]

玉梓はその不義さらに論ずべくもあらず、その悪報にて、八房の犬になりたるは、仏説の因果輪廻の義なり、（中略）かくて犬に生れかはりたるは、この上の恥やある、しからば玉梓が自業自得の悪報こゝに尽せり、玉梓既に八房の犬になりては、里見に功あり、荘周が胡蝶の輪をもつていはゞ、八房はおのづからなる八房にて、玉梓にあらず、既己に八房が玉梓なることをしらずば、誰かよくこれを弁ぜん

馬琴は自らの著書の中で、玉梓はその罪の深さゆえに犬となって生まれ変わる罰を受けたのだ、と解説している。仏教の因果応報の思想に基づくと、玉梓の転生先は人間ではなくて犬や狸になり、そのこと自体が既に罰なのである。そのように考えると、畜生道に堕ちたのは伏姫よりもむしろ玉梓の方であった、ということになるのだろうか。

（二）船虫

船虫は物語の中盤に登場する三十六、七歳の妖艶にして狡猾な

毒婦。盗賊である夫の並四郎と共謀するなど悪事を重ね、ついに文明十五年の冬、閻魔堂で落ち合った犬士六人によって捕らえられ、牛に角で突き殺されるという残酷な最期を迎える。

船虫は肝がすわって男気さえ感じる毒婦である。妖艶さで男を騙し、自分の立場が不利になると言葉巧みに人を操るところは玉梓と似ているが、その逃げ足の速さと大胆な行動はしたたかさを通り越して豪胆でさえある。人を陥れる時の頭の回転の速さと演技力、絶体絶命の場面でも魚切包丁を振り回しながら逃げようとする凄み、男に頼らず自ら手を下して殺人を犯す大胆さなど、これがもし男に生まれていたら、または悪ではなく正義の方向に向かっていたら、それなりの名声を得られたのではないかと思うほど大胆不敵な女である。

山猫の妖怪と釣り合うあたりも並の人間ではないことを表している。偽の一角によって、後妻や妾たちは精力を吸いつくされたり、飽きて食い殺されたりして次々と入れ替わっていったが、この船虫だけは妖怪と互角に渡り合い、うまく釣り合っている。逆に言うと妖怪レベルでなければ釣り合わない妖婦、ということにもなる。馬琴はこの点を次のように表している。

> 船虫といふ妾は、邪智逞しく慾ふかく、行ひ穢れし淫婦なれば、彼同病は相憐み、同気は相歓ぶ沿習にて、妖邪に触れても恙なく、且妖獣のこゝろに愜ひて、はや正妻になりしかば[12]

山猫の妖怪とその息子が倒された時にも船虫だけは逃げ延びる。いったんは捕縛されるが、色仕掛を用いて護送役の武士をたぶらかすのだ。船虫は仕草や物言いが普段は男のような女だが、悪や保身の手段としてのみ女の部分である弱さや色気を最大限に活かし利用している。また騙しやすい相手を見極める能力と機を見る瞬発力が半端ではない。

船虫が聖女たちと特に際立って違う点は「生に対する執着心」である。どんなに不利な立場でも絶体絶命の危機でも、諦めるということがない。一瞬のわずかなチャンスを逃さず逃げ出し、新しい地で新しい夫と悪事を重ねながら生きている。また船虫には歌舞伎における悪婆[13]のように、愛しい男のために悪事を働いてしまう、といった人間味がない。共感性を持たないサイコパスのような「純粋な悪」であり、「人間のエゴイズムの極地」である。特に船虫が悪党の媼内と逃げ去り、その後売女となり媼内と強盗殺人を重ねる場面では、その殺害方法が非常に残酷で生々しく、船虫の非人間性を表している。売春婦として浜辺に立ち、客と唇を

交わした瞬間を狙って舌を噛み切って殺害し、金品を奪ったあとは死体をそのまま海に捨てるという強盗のやり方である。

大岡昇平氏は自伝『少年』の中で、この船虫による殺害場面から性的な刺激を受けたと書いている。[14] しかし私は、冷血な殺人者である船虫のその非人間性に、ただただ恐怖とおぞましさを感じた。船虫には初めから人間性が欠如しており、その生き様はまるで生存本能のままに捕食と交配、脱皮を繰り返す虫のようである。「船虫」という名前にはその本質がまさに体現されているのである。

そんなしたたかな船虫も、犬士六人によってようやく捕らえられる時がきた。既に浜辺で二人を殺害したあとで、またいい鴨が来た、と近づいた相手がたまたま小文吾であったのだ。木に縛りつけられた船虫と媼内は、刀が穢れるという道節の言葉により、媼内が盗んできた牛の角に突き殺されて最期を迎える。その最期の場面がむごたらしく陰惨であればあるほど、それを静かに見守る八犬士たちとの対比で、勧善懲悪の場面がくっきりと描き出されるのである。

八犬伝の中には強欲な亀篠や不倫を重ねる夏引など数多くの悪女が登場するが、船虫に比べたらまだ「普通の悪女」で、その生命力は男の寵愛によって政治を牛耳っていた玉梓さえも凌ぐ。悪女の中でも妖婦や毒婦といった表現が当てはまるのは船虫をおいてほかにないのである。

(三) 亀篠

犬塚信乃の父番作の腹違いの姉で、若いころから近所でも評判の淫奔娘であった。番作の母が病気になるとごろつきの墓六（ひきろく）という男を家に引き込み、親の許しも得ず勝手に夫婦となった。母親が亡くなるとすぐさま墓六に大塚の家督と荘園を引き継がせ、番作が大塚の里に戻ってきても家督を譲るどころか、何かにつけて張り合い、上に立とうと仕かけた。さらに言いがかりをつけて番作を自死に追いやり、里人の非難をかわすために信乃を浜路の許婚として育てる。信乃の命と名刀村雨丸を奪おうと企み、信乃がすり替えられた偽の村雨丸を携えて足利家へ献上の旅に出ると、浜路と陣代の息子、簸上宮六との婚礼の支度を進める。自害を決意した浜路が左母二郎にさらわれ、婚礼支度を整えてやってきた宮六の怒りを買う。亀篠夫婦は怒る宮六をなだめようと村雨丸を献上しようとするが、それは左母二郎が自分の刀と取り替えた後の錆びた鈍（なまくら）刀だったため、宮六の逆鱗に触れて惨殺され、血だまりの中で夫婦はとうとう息絶えた。

亀篠は船虫や玉梓に比べれば、現代にもいるような普通の意地

悪な女、という印象を受ける。生活はだらしなく、底意地が悪くて強欲。亀篠にとって大事なのは自分のことだけで、病んだ母への義理もなく、弟や甥を死に追いやっても良心が痛むこともない。また常に番作や信乃の評判を気にして自分達と比較し、自分が上に立つように画策する。番作夫婦への対抗意識と自分の虚栄心のために美しい浜路を養女にし、豪華に着飾らせては周囲に見せびらかして歩く。そして浜路が成長すると、今度は自分達の出世の道具にしようと浜路の気持ちを踏みにじってまでも強引に婚礼を進めるのである。亀篠が気にしているのは常に周りの目であり、張り合う相手との勝ち負けである。妬みやひがみ、見栄といった女の嫌な部分を拡大させたような存在であるが、だからこそどこか人間臭く、サイコパスのような船虫とは全く異質のものを感じる。亀篠は村長の妻となってもまだ、里の人達からどこか見下されていると感じていたのではないだろうか。誰からも人望があり能力も高い弟に対して、亀篠が抱いていた劣等感と妬みこそが、執拗な嫌がらせと悲劇を生んだのである。

（四）妙椿

八百年も生きたと噂される尼僧で神通力がある。色白の美しい女で、華やかないでたちがよく似合う。しかしその正体は玉梓の怨霊が取り憑いた狸である。

妙椿（みょうちん）は盗賊から城主にまで登りつめた蟇田素藤（ひきたもとふじ）に目をつけ、伏姫の弟である里見義成の娘、浜路姫を妻にするよう唆す。素藤が縁談を断られると、妙椿は謀略と神通力により義成の嫡男義通を人質に取って浜路を要求する。しかし犬江新兵衛（八犬士）の働きにより義通は救い出され、素藤は捕らえられた。新兵衛の持つ仁の珠の前では妖術を使えない妙椿は、浜路姫を病気にさせた後洲崎明神の遣いに化け、仁の珠を床下に埋めれば快癒に向かうと伝える。さらに新兵衛と仁の珠を引き離すために、浜路姫と新兵衛が恋文を交わしているような誤解を義成に与えて、新兵衛を旅に出させる。しかし仁の珠は勝手に新兵衛のもとに返り、その霊力によって妙椿を成敗する。楼上より真っ逆さまに落ちていく妙椿の体から玉梓の怨霊が黒煙となって抜けると、妙椿は元の古狸に戻って死んでいた。

妙椿は洞察力の鋭い女である。相手がどのように言われたら動くのかを熟知し、言葉柔らかく上手に誘導する。また人間同士の疑心暗鬼の心や不安に付け入ることに長けており、相手の何が弱点かを見極める鋭い眼力を持っている。その上妖術を使うのだから、人の心を操ることなどいともたやすくできてしまう。占い師

や予言者は、時に権力者でさえ支配し思い通りに操ることができる。妖術を使いこなす尼僧であれば、女性であっても決して男性にひけを取らない立場を得ることができ、相手の心理を読み取る能力と堂々として自信に溢れた態度さえあれば人はたやすく誘導されてしまうのだ。親兵衛の功績や人徳を知っている筈の里見義成でさえ、親兵衛に疑いを持ち浜路姫から遠ざけてしまった。妙椿は人を混乱に陥れる策士であり、このような人物が近くにいたら誤解と混乱により争い事が絶えないことだろう。

妙椿の正体である牝狸は、物語の初めから玉梓の怨霊に取り憑かれていた。子犬だった八房に乳を与えたのもこの古狸である。妙椿の所業は玉梓の所業であり、妙椿の死と共に玉梓も解脱に至り、ようやく呪いが消えるのである。

三　馬琴の生きた江戸時代の思想・朱子学の影響

寛政二年（一七九〇）松平定信は「寛政異学の禁」[15]を打ちだした。これは幕府学問所で朱子学のみを正学とし、その他の陽明学、国学、仁斎学などを禁圧するという政治改革の一環である。馬琴はその二十四年後の文化十一年（一八一四）に八犬伝を執筆し始めた。馬琴にとっては朱子学の「勧善懲悪」こそが思想的信念であり、創作動機であった。この点について、馬琴は七十八歳の時の作品『新局玉石童子訓』[16]の附言の中で「稗説伝奇架空の空の言。只情態を写し得て。且善を勧め悪を懲すを。作者の本意と做せるなり」と書いている。さらに随筆『燕石雑志』[17]巻五に、「いにしへにいへることあり。人は万物の霊たるものにして、鳥獣と異なるよしは、仁義礼智忠信考悌の八ッをしればなり。もしこの八ッを亡ふときは、禽獣草木にだに及ず」と記している。

馬琴作品の真髄である朱子学の思想では、人性を善悪二元論の機軸の上にとらえようとし、万物の霊である人間は八行の徳目を備えていなくてはならないとした。つまり八徳目の「善」を欠いたものは人間以下の存在すなわち悪であり、もはや人間ではなく、動物や草木以下のものに成り下がる、という思想である。馬琴によれば悪人たちはみな「人面獣心」の徒輩であるという。そのような思想から、八犬伝に登場する悪人たちには動物の名前が入っているものが多い。信乃の伯母夫婦は「亀」篠と「蟇」六、稀代の悪女は「船虫」、玉梓も一見すると美しい名前だが、実は漢語の「玉面狸」（白面の狸）にひっかけられている。[18]

そのような視点で八犬伝の中の女性像を見ると、聖女は一点の曇りもない善で、悪女はこれもまた一点の曇りもない悪に描かれている。人間であるなら、必ずしもこのように極端ではなくグレーな部分も存在する筈である。どんなに聖人と言われる人であって

も何かしらの欠点はあるし、またどんなに悪人と言われる人であっても「蜘蛛の糸」のカンダタのように少しは善の部分を持ち合わせているのが人間の複雑さである。

しかし朱子学に基づいた馬琴の思想には善は善、悪は悪という完全な二分化がある。そのため聖女にしても悪女にしても、複雑な感情が薄く人間離れした印象を受けてしまうのかも知れない。また人間の心を持たない悪女には改心や更生という機会がないため、最期は非業の死によって罰せられる展開になるのである。この馬琴の徹底した倫理観を、川村二郎氏はこのように評している。[19]

（前略）たとえば『夢想兵衛蝴蝶物語』の中で、『忠臣蔵』のおかるが祇園の遊里に身を沈めながら、由良助に請け出された後はまた夫勘平のもとに戻るつもりになっているのを批判するあたりに、馬琴の倫理的教条主義が鮮明にあらわれている。理由が何であろうと、一旦淪落したからには、二度と節度と秩序の世界へ浮び上がることができない。（中略）『八犬伝』における船虫への、徹頭徹尾同情を欠いた処遇を見ただけでも、清潔に固執し汚濁を嫌悪し排除する、儒教的というより清教徒とでも呼びたい心性のありようは明白である。

川村氏は馬琴の潔癖さを、儒教よりもさらに厳しく穢れを排した清教徒に近いもの、と断じているのである。

四　馬琴の随筆・同時期芸能に見る女性の立ち位置

戦国時代の武士は「男児による家督相続」が定められており「男児が生まれなければお家断絶・取り潰し」が行われたため、女性の一番大切な仕事は男児を産むことであった。男児をもうけるために妾や側室を持つことが一般で、産めなければ離縁されることも受け入れなければならなかった。また、女性の仕事は武家屋敷での奉公や茶屋の売り子、芸事の師匠などに限られており、結婚も家と家との結びつきで親たちが決めるため、女性に選択の余地はほとんどなかった。特に良家の子女は親や夫に対して従順で貞節であることが求められ、儒教の三従の教えが説かれた。さらに身分の上下を問わず、密通すれば死罪となった。

馬琴が文政八年に刊行した随筆集『兎園小説余録』[20]は異聞奇談などの記録・考説を集録したものであるが、その中の『白子屋熊忠八等刑書写』にもその刑罰の重さが筆録されている。これは享保十二年に落着した事件（材木商白子屋の娘お熊と手代の忠八が恋仲となるが、母つねやお熊の散財などで身代が傾くと、持参金欲しさに又四郎を婿に取る。しかしお熊と忠八は陰で夫婦のよう

な生活を続け、邪魔になった又四郎の殺害などを企てたというもの）である。当事者たちの末路は、大岡越前の裁きで、お熊は市中引廻しの上に死罪、忠八は市中引廻しの上、獄門となっている。またそれを手伝った下女きく、ひさも死罪、母のつねは遠島、という厳しい判決であった。[21] なお、この事件は後に浄瑠璃『恋娘昔八丈』（松貫四・吉田角丸合作。安永四年（一七七五）江戸外記座初演）や歌舞伎『梅雨小袖昔八丈』、（河竹黙阿弥作。明治六年（一八七三）東京中村座初演）、人情噺や講談の『白子屋政談』など様々な芸能の素材となった。市中引廻しとなった際、お熊が黄八丈を着ていたことから、黄八丈が不吉な着物とされたのは有名である。ところが、およそ半世紀後の芸能化流行によって登場人物としてのお熊と黄八丈の着物も人気が高まったという。[22] このことは、芸能化によって貞節を守らない女性を倫理観から外れたものとして見る嫌悪からの転換を示す。つまり、フィクション化すればスキャンダルが見直される不条理であるが、見方を変えれば逆に、江戸時代の女性の立ち位置がいかに厳しい倫理観に照らされていたかがわかるともいえよう。

さて、八犬伝の舞台は室町時代に設定されているのだが、馬琴の生きているそのような時代の中で、伏姫や雛衣が身の潔白を証明するために自害し、浜路が信乃に操を立てるために死のうと思い詰めるのは自然なことと言えるのかも知れない。また貞操の概念が薄い船虫や玉梓などが厳しく罰せられるのは、当時の倫理観からみても当然の報いなのである。

身分の上下の激しかった江戸時代は、正しく生きる者が必ずしも認められる世界ではなく、欺かれたり陥れられたりと理不尽な事が横行している世界であった。そのような中で倫理を貫き美しく生きようとすれば、死は常に隣り合わせとなり、聖女たちは儚く散っていく。しかし聖女のみならず悪女もまた、勧善懲悪の思想により悲惨な最期からは逃れられないのである。

五　戦う女たちの物語として読む「八犬伝」

物語の中に登場する聖女と悪女を比較すると、悪女には二面性があり、言葉が巧みで周りを欺く能力に長けている。物腰は穏やかで言葉も柔らかく、計画のために相手をうまく誘導する能力が高い。

玉梓はたおやかでかわいい女を演じて光弘の寵愛を受け、陰では定包と通じていた。殺害計画の際にも光弘の病気を心配するふりをして、健康のために狩りなどへ行かれては、と提案している。裁きの場面でも可憐でしおらしい女を演じ、金碗八郎が諌めなければ義実も危うく騙されるところであった。船虫も優しい気配り

やもてなしで小文吾を油断させたり、被害者で可哀想な女を演じて荘助に助けを乞うたりする。妖怪の妻となり雛衣を追い詰める場面でも、親孝行とか倫理を口にして自ら命を絶つように仕向けていくのである。いかにも意地悪な女、亀篠でさえ表面的には信乃や浜路に対して親身なふりをしている。浜路に縁談を納得させる場面では、蟇六と大袈裟な芝居まで打って涙ながらに説得をする。浜路を力で押さえつけるのではなく、罪悪感や孝行の心を呼び起こさせて納得させるのである。そしてこのようなやり方は悪女全般に共通する手法である。

一方、そんな悪女たちと比較すると聖女たちは裏表がなく正直である。相手や場面によって使い分ける二面性がなく、目の前の人に対して常に誠実であろうとする。しかし、潔癖過ぎるがゆえに生き方が不器用なのである。身の潔白の証明のためには死も厭わないし、どんなに理不尽なことであっても、これは神の定めた宿命であるから仕方がないと受け入れる。このような姿勢は、現世よりもあの世や来世に視点をおいた仏教的な諦観から来るものなのであろう。仏教における「因果応報」は、現世でうまく騙せても巡り巡って必ず罰が当たるという考えであるから、たとえ今は報われなくとも来世のために清く正しく生きて、仁徳を積み重ねていかなくてはならないのである。

物語に登場する聖女たちは、まるでキリスト教弾圧時の殉教者のように一点の曇りもなく純粋だ。その純粋過ぎる一面性のために人間味が薄く、むしろ自己保身や欲のために嘘を使いこなす悪女たちの方に生き生きとした人間臭さを感じてしまう。聖女の行動や言葉は予測がつくが、悪女の繰り出す嘘や大胆な行動は想像の斜め上を行く。あくまでも予定調和の想定内の聖女たちに対して、そのように複雑で予測不能な悪女たちが対比されることによって、明暗がはっきりと分かれ、物語を奥行きのあるものにしているのである。

八犬伝に登場する女性たちは善であれ悪であれ、ことごとく非業の最期を遂げている。伏姫と雛衣は自害、浜路は斬り殺され、玉梓は斬首、船虫は牛に突き殺されている。脇役の亀篠でさえなぶり殺しの最期である。さらに関係を広げると道節の母は毒殺、浜路の母黒白はその罪により斬首、伏姫、信乃、大角の母は病死、さらに小文吾の妹であり親兵衛の母である沼藺に至っては、誤って夫の刀を受け、破傷風にかかった信乃の治療のためにその血を絞り与えて亡くなる、など穏やかな老後を迎えた女性はほとんど描かれていないのである。「人生五十年」の時代とは言っても、八犬伝に登場する女たちの人生はあまりにも儚すぎる。

しかし、物語全体の流れから考えると、女性たちの死は話の展

開に重要な意味を持っている。そもそもの発端は玉梓の死にあり、ここから長い呪いの物語が始まる。その呪いを受けた伏姫の死によって、八つの珠が飛び散り八犬士が誕生する。雛衣の死が山猫の妖怪を倒し、角太郎を八犬士に導いた。浜路の死は名刀村雨丸を左母二郎の手から道節に引き渡し、また道節と荘助を結びつけている。沼藺の死は瀕死の信乃の命を救うための妙薬となった。これら聖女の死と比べると、亀篠や船虫の死は悪事の末の罰であって、馬琴が主題とした因果応報や勧善懲悪の見本であると同時に、読者のフラストレーションを浄化する役割を果たしている。

このような視点で見てみると、八犬伝の中の女性たちは決して男性たちの脇役などではなく、物語の中心とも言える存在である。女性によって物語が始まり、女性によって物語が展開していく。そして最終的には神女となった伏姫の導きによって、里見家の復興と栄華がもたらされるのである。『南総里見八犬伝』は天から遣わされた勇者八人の単なる英雄譚ではなく、愛や矜持を守るために命をかけた女たちの戦いの物語でもあったのだ。

注（1）徳田武、森田誠吾『滝沢馬琴』（一九九一年四月十日　新潮社）

（2）中国の通俗小説。中国小説四大奇書の一つ。日本の江戸文学に大きな影響を与え、滝沢馬琴、岡島冠山らが訳出した。（日本古典文学大辞典編集委員会『日本古典文学大辞典』一九八四年一月二十日　岩波書店）

（3）全十二巻　二〇〇三～二〇〇四年　新潮社

（4）一九九三年四月二十日　中央公論社

（5）文学理論書。坪内逍遥作。勧善懲悪主義など小説の功利的な見方を排し、人間の内面を描くことを第一義とし、世態、人情、風俗などを写実的に表現することを主張。近代における最初の文学理論書。（日本国語大辞典第二版編集委員会　小学館国語辞典編集部『日本国語大辞典』二〇〇〇年十二月二十日　小学館）

（6）注1に同じ。

（7）注1、6に同じ。

（8）中国原産のバラ科の木で、和名を海棠と言い、海外から渡来した梨という意味である。枝は紫色で垂れ下がり、紅色の花が下向きに咲く。美人がうちしおれて可憐な様子を、雨に濡れた海棠の花とたとえる。（日本国語大辞典第二版編集委員会　小学館国語辞典編集部『日本国語大辞典』二〇〇〇年十二月二十日　小学館）

（9）注4に同じ。

（10）読本。馬琴作読本『南総里見八犬伝』と『朝夷巡島記』の批評とその答評を評判記風に編集したもの。（日本古典文学大辞典編集委員会『日本古典文学大辞典』一九八四年一月二十日　岩波書店）

（11）早稲田大学図書館所蔵本（三巻三冊、文政元年（一八一八）刊）を確認の上、句読点等は同館所蔵の明治三十二年（一八九九）一月、春城学人書写の活字本に拠った。

（12）濱田啓介『新潮日本古典集成・別巻　南総里見八犬伝　四』二〇〇三年八月三十日　新潮社

(13) 女方役柄の一つ。年齢も老婆とは限らず、多くはいわゆる毒婦とよばれる中年増である。粋で伝法肌であだっぽくて、思う男のためにはゆすり、つつもたせ、盗み、人殺しなどもあえて辞さないという例がふつうである。(早稲田大学演劇博物館『演劇百科大事典』一九六〇年六月　平凡社)

(14) 川村二郎『里見八犬伝』一九九七年十二月十五日　岩波書店

(15) 寛政の改革の一環として、寛政二年(一七九〇)に制定された学問統制令。幕府が正学とする朱子学を振興するため、林家の湯島聖堂を官学とし、そこでの朱子学以外の異学を禁止し、幕吏登用試験も朱子学によることにした。(武光誠ほか『日本史用語大事典』一九九五年八月十五日　新人物往来社)

(16) 弘化二年(一八四五)―同五年刊。未完作品。美少年を外面的な容色の美と、内面的な性格の美とに分かち、大内義隆滅亡における反逆者と正義の味方を対比的に配置して描き、中国白話小説を趣向にとり入れた。(日本古典文学大辞典編集委員会『日本古典文学大辞典』一九八四年一月二十日　岩波書店)

(17) 『燕石雑志』(文化七年刊、随筆)　日本随筆大成編輯部『日本随筆大成〈第二期〉19』(吉川弘文館、一九七五年)所収。『燕石雑志』は馬琴が古今の事物につき、和漢の書を博捜引証しつつ、自ら考覈(こうかく)したところを述べたもの。(日本古典文学大辞典編集委員会『日本古典文学大辞典』一九八四年一月二十日　岩波書店)

(18) 野口武彦『江戸と悪―『八犬伝』と馬琴の世界―』一九九二年二月二十八日　角川書店

(19) 注14に同じ。

(20) 文政八年刊行の十二巻および九巻の外集。別集・余録からなる随筆集『兎園』のうち。『日本随筆大成　第二期　巻三』(日本随筆大成刊行会編　一九二八・七　吉川弘文館)に所収。

(21) 注18に同じ。

(22) 吉田弥生『江戸歌舞伎の残照』二〇〇四年九月十五日　文芸社

(二〇一九年度卒業)